

教育民生常任委員会視察研修報告書

- 1 期 日 令和5年11月7日（火）～9日（木）
- 2 視 察 先 (1) 山形県鶴岡市役所（山形県鶴岡市馬場町9番25号）
(2) シルクミライ館（山形県鶴岡市羽黒町松ヶ岡字松ヶ岡25番地）
(3) 新潟県三条市役所栄庁舎（新潟県三条市新堀1311番地）
- 3 視察内容 (1) ユネスコ食文化創造都市について
(2) 3つの日本遺産に認定された鶴岡市から学ぶ歴史文化の守り方
(3) 三条市子ども・若者総合サポートシステムについて
- 4 参 加 者 三宅小百合委員長、永井純一副委員長、畑野麻美子委員、前田嘉彦委員
伊藤聖一議員、古屋信二委員、廣瀬陽子委員（7名）
- 5 随 行 者 井尻三千代文化課長、小澤清和議会事務局次長

6 視察概要

- (1) ユネスコ食文化創造都市について

○鶴岡市の概要

- 1) 人 口 119,029人（9月30日現在）
- 2) 世帯数 49,552世帯（9月30日現在）
- 3) 面 積 1,311.53km²
- 4) 概 要

平成の大合併により人口は山形市に次ぐ県内第2位、面積は東北第1位、全国では第10位となった鶴岡市は、山形県の西北部にある庄内地域の南部に、新潟県に隣接して位置している。鶴岡市の東部から南部にかけては、そのほとんどが磐梯朝日国立公園に包含される出羽丘陵、朝日連峰、摩耶山系の山岳丘陵地帯が、広大な森林地帯を抱えて広がっており、市城の70%を占めている。また、これに接する北西部には、赤川水系の赤川、大山川、最上川水系の京田川、藤島川等の河川が貫流する庄内平野が広がり、「はえぬき」や「つや姫」、新品種「雪若丸」などのおいしいお米が生産される日本有数の米どころとして知られる。この平野の西部は日本海に面しており、約42kmにわたり、海岸線・海浜・砂丘地が、美しい景観を見せながら広がっている。

庄内平野の政治、経済、文化の中心都市として栄えてきた鶴岡市は、江戸時代は譜代大名の酒井氏が治める庄内藩13万8千石の城下町で、その長い歴史と文化は、現代まで脈々と受け継がれ、城下町の面影を残す情緒あふれる都市である。

市街地の中心部には、鶴ヶ岡城社をはじめ、国指定史跡の藩校致道館、致道博物館や人物資料館大宝館、藤沢周平記念館があり、周辺は鶴岡市の歴史や優れた文化性を象徴する地区となっている。また、藩校致道館の時代から培われた鶴岡の教育文化は、様々な分野

で優れた人間活動を生み、文人・偉人を多く輩出してきている。

鶴岡市の各地には、人々の厚い信仰の中で生み出された伝統芸能が受け継がれている。国の重要無形民俗文化財「黒川能」、山五十川集落の「山戸能」、「山五十川歌舞伎」をはじめ、多くの集落に神楽や獅子踊りなどが伝わっている。また、世界に誇る歴史文化資産である出羽三山は、1,400年余にわたり、修験の地として東日本の信仰の中心としてあり続けている。

現在の庄内地域では、平成3年に庄内空港が開港して以来、山形自動車道が供用開始され、さらに、24年3月には日本海東北自動車道の温海～鶴岡間が開通するなど、飛躍的に高速交通体系が整いつつあり、大きな経済効果、人的交流効果をもたらしている。

また、平成13年5月には慶應義塾大学先端生命科学研究所、17年4月には東北公益文科大学大学院が開設されるなど、高等教育機関の充実が図られている。これらの高等教育機関と地域産業の連携により、新たな産業を発展させるとともに、地域資源を高度に生かした産業の展開を進めていくこととしている。

豊かな自然環境や各地域に伝わる歴史的・文化的な地域資源を生かした地域づくりをベースに、健康と福祉のまちづくり、便利で快適なくらしの実現を図り、市民生活の向上はもとより、広域的にも貢献できる庄内地域の中核都市として、さらなる発展を目指している。

なお、学校給食の発祥の地であり、ブリッジバンジー（橋の上から跳ぶバンジージャンプ）が国内で最初に開設された地でもある。1821年に書かれた文献に、波乗り（サーフィン）に関することが記されており、波乗り発祥の地と言われている。また、養蚕から製糸、製織、精練、プリント、縫製にいたる絹織物生産の一連の工程のすべてを同一地域内で行うことができる、国内唯一の地域と言われている。

○視察事業内容

山形県鶴岡市は気高い山々から広大な庄内平野、日本海へと至る変化に富んだ地形の中で、海の幸・山の幸に恵まれた豊かな食文化を有し、先人たちの知恵と情熱によって独自の食文化を今に伝えている。1,400年以上にわたり信仰を集める山岳修験の聖地「出羽三山」には、自然とその山の恵みを「生きるための精進料理」として今に伝え、また、家庭でも祭りと精神性を分かち合う「行事食・伝統食」が数多く継承され、鶴岡の風土に息づいた精神文化と結びついた独自の食文化が色濃く残っている。農家の人々が数百年にわたり「種」を守ってきた「在来作物」は60種類以上確認されており、「生きた文化財」として大切に継承されている。これらの歴史と食文化を背景に、平成26年（2014）12月に「ユネスコ食文化創造都市」に国内で初めて認定された。

○視察の意義

坂井市にも坂井平野があり、在来種のソバの生産、三里浜砂丘地や北部丘陵地等では伝統野菜が生産されており、伝統料理も多く伝わっていたが、時代とともに失われつつあることから、ユネスコ食文化創造都市に国内初認定された鶴岡市で学び、次世代に坂井市の生活文化や伝統行事を継承できる体制を整えたい。

○視察の目的

以下の事項について調査研究をする。

- ・ユネスコ食文化創造都市に認定されるまでの背景と経緯は。
- ・認定前後にユネスコからの支援はどのようなものがあったのか。また、国・県の支援は。
- ・「ユネスコ食文化創造都市」に認定されたことでどのような影響があったか。
- ・子どもたちへの伝承（教育）について、どのように取り組んでいるのか。 など

○調査内容

【ユネスコ食文化創造都市とは】

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が2004年に創立した枠組み。文学・映画・音楽・工芸（クラフトとフォークアート）・デザイン・メディアアート・食文化（ガストロノミー）の創造産業7分野から、文化の多様性の保護と世界の持続可能な発展に貢献することを目的としている。

【認定された背景】

鶴岡の食文化は古くから、「生産者」・「漁師」・「料理人」・「職人」などの手によって継承されており、四季折々の豊かな食材に恵まれている。各家庭に受け継がれる「郷土食」や古くから伝わるお祭りの中で振る舞われる「行事食」も数多く残されている。また60品種の在来作物が受け継がれており、1,400年以上にわたり信仰を集める山岳修験の聖地「出羽三山」には、「生きるための精進料理」が今に伝わっている。

【鶴岡食文化創造都市推進の体制づくり】

鶴岡食文化創造都市推進協議会を組織（市長を会長として33団体で構成）し、事業推進員2名配置。鶴岡市食文化創造都市推進プランを策定している。

【産業振興】

料理人育成事業、料理人と生産者の連携促進、地産地消・消費拡大、食品製造業の振興に取り組み、単に食材や料理を紹介するのではなく、それができるまでの背景にある物語を農家や漁師、料理人から引き出し、昔と今の鶴岡の食文化の魅力を掘り起こし、未来につなげるための活動に取り組んでいる。

【交流人口の拡大】

鶴岡ふうどガイドの育成（フードツーリズム）、海外プロモーション、イタリア食科学大学との戦略的連携協定の締結、辻調理師専門学校との包括的連携協定の締結を行い、庄内酒まつりの開催、おいしい食の映画祭の開催、国際生ハムサミット&フェスティバルの開催、ふうどフェスタ等を開催し、農水省SAVOR JAPANの認定を受けている。

【地域づくり】

郷土食のレシピ集を発刊、料理教室の開催、食によるSDGs理解促進、子どもたちへの食育、食文化学習支援、学校給食の取り組み、食文化を紡ぐ人々にスポットを当てて取材記事を編纂、また豊かな食の地域づくり研究会を設立、友好都市との連携事業の展開、つるおか伝統菓子の伝承、市民活動の推進等に取り組んでいる。



鶴岡市役所での視察の様子



鶴岡市議会議場

(2) 3つの日本遺産に認定された鶴岡市から学ぶ歴史文化の守り方

○鶴岡市の概要

1、2 ページに記載

○視察事業概要

日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを認定するもので、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に戦略的に発信することにより、地域の活性化・観光振興を図るものである。鶴岡市では、文化庁が認定する日本遺産に3つが認定されている。

1. 自然と信仰が息づく『生まれかわりの旅』

～樹齢300年を超える杉並木につつまれた2,446段の石段から始まる出羽三山～
(県社会教育課)

2. サムライゆかりのシルク 日本近代化の原風景に出会うまち鶴岡へ (市政策企画課)

3. 荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間

～北前船寄港地・船主(せんしゅ)集落～ (市観光物産課)

○視察の意義

坂井市では、旧石器時代の遺跡が確認されており、川や海、用水などの「水のみち」、街道や鉄道などの「陸のみち」、そして湊を通じた交流・交易により日本海沿岸各地に伝播した「文化のみち」がある。これらが歴史文化のストーリーにおいても重要な骨格となっていることから、3つの日本遺産を有する鶴岡市で学び、市内に点在する文化遺産を守ることが課題であると考えます。

○視察の目的

以下の事項について調査研究をする。

- ・ 3つの日本遺産が認定された経緯と背景は。
- ・ 文化庁からの支援は、どのようなものがあったのか。
- ・ 子どもたちへの伝承(教育)について、どのように取り組んでいるのか。

- ・ 3つの日本遺産がもたらした影響は。 など

○調査内容（出羽三山は県担当のため2つについて調査）

【荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間「～北前船寄港地・船主（せんしゅ）集落～」】

庄内藩の城下町だった鶴岡にもその寄港地があり、特に加茂地域は湾に面して、廻船問屋が並んでいた重要港であり、今でもその町割はそのまま残っている。鼠ヶ関には藩の番所があり、そこから北上した加茂は城下の生活物資を陸揚げする重要港で、廻船問屋が並んでいた。令和3年に鶴岡市北前船日本遺産推進協議会が設立され、案内板の設置、まち歩きガイドの活用、構成団体との連携、子どもたちへの伝承に取り組んでいる。

情報発信については、3つの日本遺産を一体的かつ効果的に活用した情報発信等を行うことにより、歴史的魅惑や特色の一層の周知を図ろうとしている。

【サムライゆかりのシルク 日本近代化の原風景に出会うまち鶴岡へ】

明治維新で庄内藩士約3,000人が刀を鋤に替え、明治5年に荒地を開墾し切り拓き松ヶ岡の蚕糸業が始まったことが、サムライゆかりのシルクの始まりの所以である。今も養蚕から絹織物まで一貫工程が残る国内唯一の地である。鶴岡市では、松ヶ岡以外にも六十里越古道沿いの田麦俣集落に、四層構造で暮らし・養蚕などが一つの建物にまとまった多層民家が現存している。さらに、国内ではここだけの精練工程が明治時代創業の工場で行われるなど、絹産業の歴史、文化が保存継承とともに、新たな絹の文化価値の創出にも取り組んでいた。

平成21年から鶴岡シルクタウンプロジェクトを開始し、文化庁から文化芸術振興費補助金（日本遺産魅力発信推進事業）を受け、魅力発信等の事業を行った。（総額6,252万8,000円）

日本遺産ストーリーを活かした、地域の歴史文化への愛着・シビックプライドの醸成と交流人口の拡大を図り、子どもの成長に応じた絹産業に触れる機会の創出を行っている。



致道博物館にて学芸員から説明を受けている様子



シルクミライ館にて館長から説明を受けている様子

（3）三条市子ども・若者総合サポートシステムについて

○三条市の概要

- 1) 人口 92,638人（10月1日現在）
- 2) 世帯数 37,220世帯（10月1日現在）

3) 面積 431.97 km²

4) 概要

新潟県のほぼ中央に位置しており、人口は県内4位から5位の間を推移している（現在は5位で、4位が新発田市）。金物の町として全国的に有名で、鍛冶を中心とした金属加工業が盛んである。現在でも市内には、刃物や工具など多くの商品を作る鍛冶職人が存在している。人口比での社長の割合が日本一多い町として知られている。アウトドアで地方創生事業を行なっている、アウトドア製品の製造販売会社スノーピークがある。ふるさと納税の令和4年度寄付金額は50億円を超え、年度当初の目標額の2倍となっている。

○視察事業概要

三条市では、虐待やいじめ、不登校、発達障がい、引きこもりなど、様々な問題で支援を必要としている子ども・若者に対し、乳幼児から就労に至るまで継続的かつ総合的な支援を行うことを目指し、「三条市子ども・若者総合サポートシステム」を整備している。

「所属機関が変わると、支援が途切れるのではないか心配だ。」

「困っているけど、どこに相談したらよいか分からない。」

「相談しているが、うまくいっていない。」

こういった声に対応するためこのシステムでは、保育所（園）や幼稚園、小・中・高等学校など、子ども・若者に関係する機関や相談支援機関、組織などが連携し、切れ目なく個々に応じた支援を行う仕組みをつくっている。

○視察の意義

坂井市では、重層的支援体制が整い、「ここサポ」としてワンストップでの相談体制が整っている。三条市では、乳幼児から就労・自立に至るまで切れ目のなく一貫して、個に応じた必要な支援を総合的に受けられるようにしているということであり、そのサポートシステムについて研究したい。

○視察の目的

以下の事項について調査研究をする。

- ・その整備までの背景と経緯は。
- ・幼保園から小学校、中学校、高校との連携はどのようにしているのか。また、それ以降については、どのようにしているのか。
- ・近隣住民からの情報提供があるが、支援を望まないケースはあるのか。
- ・事業経費はどの程度か。 など

○調査内容

三条市では、子ども・若者という「三条市民に必要なサポート体制をつくるのは、三条市の責任だ。」という理念に立ち、「三条子ども若者・総合サポートシステム」を構築した。子育て支援に関する窓口の一本化、ライフステージに応じた切れ目のない子育て支援、三条っこ発達応援事業の取り組みについて調査を行った。

平成20年4月から教育委員会に「子育て支援課」を設置。市民が分かりやすいワンストップ窓口を実現した。教育委員会の中に学校教育課と子育て支援課があり日常的に連携を行

なっている。子育て支援課の業務は、幼児教育、家庭教育、妊娠・子ども医療、医療母子保険、子ども予防接種、児童福祉を行っています。令和5年度から子ども家庭庁が推進する「子どもの育ちサポートセンター」に置き換えていくとのことであるが、三条市では平成25年から青少年育成センターを設置し、子どもの育ちの段階に応じたきめ細やかな支援を継続的に行う教育機関として開設している。総合支援係が16名、発達応援室に7名を配置。他に市直営の児童発達支援事業所「子ども発達ルーム」がある。

平成21年には三条市子ども・若者総合サポート会議が設置され、妊娠期から就労に至るまで、切れ目なく総合的に必要な支援を行うため、市がその情報を一元化し、関係機関が連携して、子に応じた支援を継続的に行えるようにするシステムを構築した。三条市では、三条っ子発達応援事業の基本的な考え方として、「子どもの育ちや個性は一人一人異なる。中には発達の凸凹がある子どももいることから、子どもの個性を早期に発見し、個に合った支援のため、年中児発達参観を行なっている。



三条市役所栄庁舎での視察の様子



教育委員会内に子育て支援課がある（栄庁舎）

7 所見・感想等

○三宅小百合 委員長

・ユネスコ食文化創造都市について（鶴岡市）

国内初でユネスコ食文化創造都市として認められた背景には、伝統行事と伝統食を大切にする市民の気質を感じた。黒川能や出羽三山の山岳信仰、そして生活の中で守り続けた「生きた文化財」である在来種60種に大きな感動を覚えた。坂井市の伝統や文化、農水産品を大切にすると同時にシビックプライドの醸成にも取り組みたい。

・3つの日本遺産に認定された鶴岡市から学ぶ歴史文化の守り方（鶴岡市）

坂井市には歴史的風致維持向上策定計画案の中に、6つのストーリーがあるように数多くの歴史が点在している。これらを調査研究するとともに、日本遺産等の認定に向けてブラッシュアップしていく必要があると感じている。その視点から3つの日本遺産を有する鶴岡市の視察から学ぶことは大きかった。なお、日本遺産を担当している所管は、山形県、政策企画課、観光物産課（ANA総合研究所が申請）がそれぞれ担っている。地域の方々の情熱と誇りを強く感じた視察であった。

・三条市子ども・若者総合サポートシステムについて（三条市）

教育委員会の中に子育て支援課を設置することで、妊娠から就労までをサポートする体制は、若い世代が安心して子育てができる環境であった。また早期に発達状況を確認することで、それぞれの個性を大切にしながら成長を見守る体制ができています。はじめての子育てに不安を感じている親を支援し、三条市の【子ども・若者という「三条市民」に必要なサポート体制をつくるのは「三条市の責任」だ。】という理念を実現した体制であった。

○永井純一 副委員長

・ユネスコ食文化創造都市について（鶴岡市）

日本で初めて、ユネスコ創造都市ネットワークに加盟した鶴岡市。その背景には「①60種類の豊富な「在来作物」 ②家庭で親しまれる多様な郷土食、行事食 ③精神文化である～出羽三山・修験道の文化、黒川能とともに継承される食文化」がある。食文化創造都市の取り組みとして、産業振興、交流人口の拡大、地域づくりの3点を挙げている。特に印象に残ったのが「産業振興」の料理人育成事業である。料理人のさらなる技術の研鑽を促し、食の魅力向上に資するために実施するものであり、地元の食材を美味しく多くの人に食してもらおう作戦だと思う。さらに、料理人と生産者の連携により食の魅力向上を目指すものである。

料理人育成に目を付けたところはよいアイデアだと思う。食は美味しくなければ広がらない。坂井市でも、豊富な食材を美味しく提供し、全国の人に食してもらおうために試みてよいのではないかと感じた。

・3つの日本遺産に認定された鶴岡市から学ぶ歴史文化の守り方（鶴岡市）

鶴岡市の日本遺産は3件あり、一つの市では珍しい。その3件は「①出羽三山」「②サムライゆかりのシルク」「③北前船寄港地・船主集落」である。3つの日本遺産を活用し認知度・知名度向上が目的である。これまでの取り組みとして、認定地域としての認知度向上、観光活用、修学旅行・教育旅行の需要の活用がある。課題として、インバウンド受入体制整備、日本遺産を活用した観光地としてのブランド化などが挙げられていた。なお、サムライゆかりのシルクでは、サムライの精神を受け継ぎ世界に発信するブランド「鶴岡シルク～侍絹（samuraisilk）」シルクミライ館にて現地視察を行った。説明者（企業社長でありシルクミライ館の館長）の熱い思いと行動力に感銘を受けた。

坂井市は北前船で日本遺産認定を受けているが、活用が弱いと思う。地元（故郷）のことをよく知り誇りを持って、素晴らしさを継承しながら多くの人に伝えていくことが大事である。それには人材が大事であると思う。坂井市として、人材を見つける、育てることに力を入れてほしい。

・三条市子ども・若者総合サポートシステムについて（三条市）

現在、国で妊娠から切れ目ない子育て支援に取り組み始めたところである。三条市では平成20年に組織機構の見直しにより、教育委員会に子育て支援課を設置して、子育て支援に関する窓口の一本化を図り、先進的に取り組んでいる。

理念として、子ども・若者という三条市民に必要なサポート体制をつくるのは、三条市の責任だということであった。サポートシステムのポイントは、理念と共に「1. 教育委

員会内に子育て支援課があり、調整組織として機能している」「2. 虐待、障がい、問題行動、ひきこもり等への支援ネットワークを統合している」「3. 外部機関との情報共有化について整理がなされており、現行の個人情報保護法下で機能できるようにしている」「4. 保護者支援ツールとして子育てサポートファイル「すまいるファイル」を全子どもに配布」「5. 中学校卒業後もフォローできるような若者まで（35歳）としている」ということである。

今後の大きな課題として、中学校卒業後の把握が難しいということであった。来年度を目指して、中学校卒業後も関わられるようにしていくため、高校に職員を派遣するための予算の確保を目指しているとのことであった。

坂井市でも、相談体制や連携は進んでいる。子育て支援についても、三条市の取り組みを参考にして、切れ目ない支援体制を構築してほしい。

○畑野麻美子 委員

・ユネスコ食文化創造都市について（鶴岡市）

2010年からのユネスコ創造都市ネットワーク加盟に向けた取り組みは、鶴岡市の歴史と生きた文化財としての在来作物など培われてきたものが土台にあり、産業振興、交流人口の拡大、地域づくりに生かされ、10年以上の取り組みは大変だったと思う。その成果が、今現れてきており、地域にも根付いてきていると思う。

食文化は生きていく上で大切なものであることを原点に、暮らしの中に文化として位置付けられていくことが大事であると気付かされた。

それがゆえに、郷土料理、伝承料理における素材や調理方法が見直されているのだろう。現在の食生活を見直していく食文化として、在来作物の中に含まれ栄養素などにも視点を置き、市民全体、地域全体の文化になって、鶴岡市のどのお店に入っても「おうちご膳」が、郷土料理が食べられる。体によい食事が提供される、そんなまちづくりが人づくりへとつながっていくといいなと思う。

坂井市ではその辺を目指して、子どもから大人までの地道な食文化として歩いていくことが望ましいのではないかと感じた。

・3つの日本遺産に認定された鶴岡市から学ぶ歴史文化の守り方（鶴岡市）

鶴岡市の「山（出羽三山）」「里（サムライゆかりのシルク）」「海（北前船寄港地・船主集落）」どれも豊かな歴史のストーリーがあふれている。

①出羽三山

平成28年認定。自然と信仰が息づく『生まれ変わりの旅』はストーリー性にあふれていて、間違いなく日本遺産を感じる。歩いてみたかった。

②サムライゆかりのシルク

松ヶ岡開墾場をはじめ多層民家が現存するのがすごい。パンフレットには説明が十分されているが、ぜひ訪ねてみて感じてほしい。とにかく絹産業の歴史、文化を保存継承し、新たな絹の文化的な価値を生み出している。

③荒波を超えた男たちの夢が紡いだ異空間

三国湊も北前船の寄港地として日本遺産になったが、その後の動きがあまり見えてこ

ない。新しくなった龍翔博物館とも連携し、街並みを生かした取り組みが求められる。鶴岡市のように「北前船ゆかりのまちなかめぐり」なども日本遺産を大事にした市民へのアピールになるのではないか。今後を楽しみにしたい。

・三条市子ども・若者総合サポートシステムについて（三条市）

教育委員会に子育て支援課が入り、担当がひとつになり、市民が分かりやすいワンストップ窓口の実現。きめ細かな子供の育ちをサポートする仕組みである。子供の育ちを一貫して見ていこうとするところは、市民にとっても分かりやすい。

手厚くなっている反面、おせっかいになりやすい面もある。バランスの取れた対応と子育て支援は親や保育士、教師支援にもつながる。そこにも十分な手を差し伸べることで、保育士の数を増やしたり、親の子育ての大変さにも寄り添うなど担当者で共有できた。

子供の相談をここでしっかり受け止めようとするサポート体制は、とても大事である。また、チームを組んで取り組むところも、職員にとっても心強く、子育て支援に優しくなれる一面かとも思う。

坂井市も「ここサポ・子育て編」があってもよいのではないかと感じた。

○前田嘉彦 委員

・ユネスコ食文化創造都市について（鶴岡市）

山里海に囲まれた豊穡の地の鶴岡市は、地形的にみても多彩な食資源的にも坂井市と似ていると思われた。「季節を感じ、食材にふれ、誰かのために、自分のために料理をすることを通して一人一人の大切な記憶となっていくように」と伝統行事と食文化の保存・伝承を目的として、鶴岡の郷土食・行事食レシピ集「つるおかおうち御膳」を発刊しており、その郷土食レシピ数の多さには驚きを覚えた。坂井市でも持続可能な食文化にこだわりを持ち、次世代へ食文化を伝承させていくべきと感じた。

・3つの日本遺産に認定された鶴岡市から学ぶ歴史文化の守り方（鶴岡市）

山里海の3つの日本遺産があるのが鶴岡市であるが、「出羽三山」は山形県文化財活用課、「サムライゆかりのシルク」が政策企画課、「北前船寄港地・船主集落」が観光物産課とそれぞれ担当部局が異なっている。「3つの日本遺産があるまち」をキャッチフレーズとして観光パンフレットやプロモーションなど様々な機会に連携していることで相乗効果による情報発信の強みを感じられ、福井県の5つの日本遺産の連携強化も考えていく必要があると思われた。また、シルクミライ館の現地視察では、サムライの精神を受け継ぎ世界に発信する「鶴岡シルク」ブランドを立ち上げた鶴岡織物工業協同組合の取り組みにも感銘を受けた。

・三条市子ども・若者総合サポートシステムについて（三条市）

「子ども・若者という三条市民」に必要なサポート体制をつくるのは、「三条市の責任」だという理念に立ち、平成20年4月から教育委員会に「子育て支援課」を設置し、子育て支援に関する窓口を一本化して、ライフステージに応じた切れ目のない一貫した支援を行うため「三条市子ども・若者総合サポートシステム」を構築している。坂井市でもこの

ような理念を持って、総合的にサポートしていくことは重要だと感じた。

中学校を卒業して、いわゆる「引きこもり」や「ニート」になったとしても、学校に替わって関係機関と連携し支援体制を構築していくことは比較的可能なことであるが、社会に出るまで問題が無かった市民が、社会人になってから「引きこもり」になった場合などは手が回らない現状があり、一人一人のライフステージに沿った切れ目のない支援を行うには、まだまだ課題があり、限界もあるように感じた。

また、教育委員会に「子育て支援課」を設置しても、放課後児童クラブにおける学校と放課後児童クラブとの関係は縦割りのままであり、坂井市の現状と大差が無いように感じた。

○伊藤聖一 委員

・ユネスコ食文化創造都市について（鶴岡市）

鶴岡市総合計画の食や食文化に係る実施計画として、食文化創造都市推進プラン作成し取り組みを進めている。「食の理想郷へ」を基本理念として、「食文化の伝承・創造、食に関連した産業振興」「食文化を生かした交流人口の拡大」「食文化による地域づくり」という3つの基本目標と108の取り組みを定め、5つの成果目標の達成を目指している。ユネスコ食文化創造都市認定を地方創生に上手につなげている。

鶴岡市の大きな特徴は、60種にもなる伝統野菜を守り継承している点だと思われる。また、坂井市同様に人口減の反面、核家族化が進展し、食文化の伝承に課題があるようであった。

・3つの日本遺産に認定された鶴岡市から学ぶ歴史文化の守り方（鶴岡市）

北前船日本遺産認定後については、北前船日本遺産推進協議会を設立し、案内板の制作やまち歩きガイド、セミナー開催など多くの事業に継続的に取り組んでいる。

特に感心したのは、子どもたちへの伝承についてである。北前船に関する歴史や文化財など、関わりのあるものを資料として地元の小学校から高校まで授業で活用していた。

幕末から引き継がれた庄内スピリッツを強く感じたことが、強く印象に残った。

・三条市子ども・若者総合サポートシステムについて（三条市）

（公務により不参加）

○古屋信二 委員

・ユネスコ食文化創造都市について（鶴岡市）

鶴岡市の食文化の特色に在来作物の種類が60種類あり、それを活用した多様な郷土食、行事食があり、そのことがユネスコに認められたということであった。その陰には、食文化創造都市推進プランに基づくプロジェクトの展開が強く感じられた。

本市においても、在来作物・伝統料理などがたくさんあることから、ユネスコ登録とまではいかなくても、食育を通じて保存継承が必要であると感じた。

- ・ 3つの日本遺産に認定された鶴岡市から学ぶ歴史文化の守り方（鶴岡市）

出羽三山、サムライゆかりのシルク、北前船寄港地・船主集落と3つの日本遺産を生かし、県・市の所管が違っても連携して、認定地域として情報発信し展開していた。

「3つの日本遺産があるまち」は、強力なキャッチフレーズであり「鶴岡市日本遺産活用事業」では有効に観光活用していた。

本市においても坂井市三国湊が日本遺産に認定していることから、活用事業をもっと進めるべきと感じた。

- ・ 三条市子ども・若者総合サポートシステムについて（三条市）

特筆すべきことは、子育て支援に関する窓口が一本化（教育委員会部局）によることで、市民が分かりやすいワンストップサービスが素晴らしいと感じた。それぞれの4つの実務者部会にて、個に応じた支援を継続的にできるシステムは興味深かった。

子どもの育ちサポートセンターでは、妊娠出産期から学童・青年期の35歳まで必要なサポートを受けられるよう、関係機関と調整し支援を行っている。35歳までの支援は他の自治体では聞いたことがないと思う。義務教育を卒業してしまうと支援を受けられる対象者の把握は難しいと課題はあるが、大変よいシステムであると感じた。

本市においても「ここサポ」教育部局との隔たりを感じるところがあるので、参考にしてみてはどうかと提案したい。

○廣瀬陽子 委員

- ・ ユネスコ食文化創造都市について（鶴岡市）

鶴岡市は食文化創造都市として、「産業振興」「交流人口の拡大」「地域づくり」に取り組んでいた。「地域づくり」として、家庭や地域、行事などの料理を紹介したレシピ本「つるおかおうち御膳」を刊行し、食育事業や料理教室での活用や、地域の食文化を学ぶ教材として活用していた。三世代同居や地域行事が減っていく中、坂井市でもこのようなレシピをまとめたものがあれば、伝承料理の保存につながるのではないかと感じた。

食文化は、各家庭や地域で受け継がれてきているものであり、意識しなければ伝承されず廃れてしまう。家庭や地域任せでなく、行政も協力し、伝承していく必要があるように感じた。

- ・ 3つの日本遺産に認定された鶴岡市から学ぶ歴史文化の守り方（鶴岡市）

「出羽三山」「サムライゆかりのシルク」「北前船寄港地・船主集落」と3つの日本遺産を有している。食文化とあわせ、多様な観光と学びが揃っており、教育旅行や修学旅行先にも選ばれることが増えているとのことであった。

鶴岡市は、一体的かつ効果的に活用した情報発信などを展開し、歴史的魅力や特色の周知を図ることをこれからの取り組みとしている。

坂井市も文化財は多く、観光と学びの要素もある。観光地や食材、産業がそれぞれ点でのPRやブランディングではなく、一体的、効果的に周知するよう一層の工夫が必要であると感じた。

・三条市子ども・若者総合サポートシステムについて（三条市）

子育て支援に関する窓口を教育委員会に一本化し、乳幼児から35歳まで同じ課で担当している。

坂井市でも教育委員会と子ども福祉課がさらに協力し、さらなるサポート体制の整備をすることで、発達障害の早期発見ができるなど、早い段階でそれぞれに合った支援を行うことが、将来的に社会に適応しやすい状況をつくることができるようになるのではないかと思った。担当課が分かれていると縦割りになってしまう部分を少しでも解消するための体制整備は必要であると感じた。